黒谷舘跡の埋蔵文化財調査

渡部　賢史
学芸員

只見町教育委員会では、水路・農道などの農業生産基盤整備や区画整理を行なうため３２５０㎡の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

黒谷舘跡について

黒谷舘跡は、現在の朝日地区センター周辺にあったといわれ、住所が黒谷字舘です。字名が舘と言うこともあり、館（やかた）跡があったことが推定されます。

発見された遺構（昔の形跡）

平成24年度の調査で発見された遺構は、縄文時代、弥生時代、中世の遺構などさまざまで次のとおりです。

▽竪穴状遺構　３基
▽柱列跡　２基
▽土坑　３８基
▽溝跡　４基
▽ピット（柱あと）　１８９基
▽性格不明遺構　２基

発見された遺構の中からいくつか紹介します。黒谷舘跡は、中世の舘跡とされていましたが、縄文時代や弥生時代の遺構遺物も見つかっています。

竪穴状遺構（家のあと）

竪穴住居跡に非常に良く似た痕跡を３基確認しています。竪穴住居跡としなかった理由は、カマドの痕跡がなかったからです。屋根を支えるための柱跡は数基確認しています。また、土器などの遺物がほとんど発見されませんでした。しかし、１号

△１号竪穴状遺構完掘状況

△２号竪穴状遺構検出状況

△３号竪穴状遺構検出状況

△３号竪穴状遺構完掘状況

竪穴状遺構については他の遺構と重なっていて、その遺構からは、遺物が発見されていることから、縄文時代中期後葉以前の痕跡と推定されます。

柱列跡（柵や塀）

2列の柱列を確認しています。1号柱列は、中央のピットに、礎石（家の基礎）を検出しました。2号柱列については、すべての柱跡が非常によく残されており、径が30～40㎝で、深さが、30～50㎝でした。何に利用されていたかについては、不明です。

土坑（ゴミ穴、トイレ）

今年度は38基の土坑を検出しています。今回の調査では、似たような土坑がいくつも確認されています。

1号土坑、23号土坑、26号土坑、27号土坑、30号土坑、43号土坑が非常によく似ています。これらの土坑は、貯蔵穴と呼ばれどんぐりや木の実などを貯蔵するための穴と考えられます。

5号土坑は、楕円形の形をした土坑で、弥生時代初頭の土器が出土しています。また、22号土坑からは、縄文時代中期後葉の土器が確認されました。

※縄文時代中期
↓4000年～
5000年前

※弥生時代初頭
↓約2300年前

△5号土坑完掘状況

△22号土坑完掘状況

△5号土坑出土遺物

△22号土坑出土遺物

△27号土坑完掘状況

△27号土坑検出状況

溝跡（側溝）

溝跡は、4条検出されています。

1号溝跡は、調査区のほぼ中心に検出されました。明治の条量図（字切図）に記載されている溝跡で、国道方面から伊南川に向かって流れる流路跡と推定されます。

2号溝跡は、朝日地区センターのすぐ脇に検出されました。この溝跡は、館の堀跡と考えられます。溝跡からは、木製品が数多く出土しています。例えば、箸や、曲物（桶）などの側板や蓋か底板、下駄、紡錘車（糸を紡ぐ道具）、ヘラ状木製品、曲物を止めるための皮などが出土しています。中でも一番貴重なものは、漆器で、8点出土しています。その内の一つの裏側に家紋が書かれています。その他に、縄文時代か弥生時代の打製石斧や、サイコロなどが出土しています。

これらの出土遺物の年代から16世紀～17世紀（室町時代終わり～江戸時代初め）頃の堀跡と推定されます。

この堀跡は、朝日地区センター周辺を中心に、コの字状に区画されていたと伝えられています。

△1号溝跡完掘状況

△2号溝跡検出状況

△2号溝跡出土　漆器

△2号溝跡検出状況

△2号溝跡出土　紡錘車

△2号溝跡出土　漆器

△2号溝跡出土　下駄

△2号溝跡出土　桶の蓋か底板

△2号溝跡出土　漆器の底

△２号溝跡出土　打製石斧

△２号溝跡出土　サイコロ

△1号性格不明遺構の状況

性格不明遺構
（良くわからないもの）

今回の調査では、3基の性格不明遺構を確認しています。特に、1号性格不明遺構は、焼土（火を受けて、赤くなっている土）が多量に含まれていました。なぜ焼土が多量に含まれていたのかは不明ですが、穴の中の土の状態を見ると、穴で火を使ったよりは、穴の周辺で火を使って埋めたという状況でした。

倒木跡（木の倒れたあと）

倒木跡と考えられる形跡がいくつも確認しています。その形跡からは、縄文土器や弥生土器が出土しています。

朝日地区センターの周辺は、風が強いため、中世期に暴風林的や役割を果たしていたのか、縄文、弥生時代が森林だった可能性を示しているものと考えられます。

黒谷舘跡の古文書記録

黒谷舘跡の古文書記録には次のようなものがあります。

新編会津風土記

『南ヨリ子丑ノ方1町ニアリ、東西二十五間、南北四十間、何ノ頃ニカ山内兵庫某住セシト云、・・・』

黒谷村の北東方向に約100m、東西約45m、南北72m、年代不詳、山内兵庫が住んでいた。

新編会津風土記は、会津藩で1803年～1809年に編纂されたものです。

その他に、旧事雑考や塔寺異本長帳など、『山内兵庫』という人物や黒谷の龍泉寺の記録などさまざまな記録が見られます。それらの記録は、16世紀に集中し、2号溝跡（堀跡）の年代とほぼ時代が合うことになります。

おわりに

黒谷舘跡は、非常に遺構（昔の形跡）の残りがよい場所です。遺跡中心部の建物がある場所は、壊されていると思われますが、その周辺部は、まだ舘の形跡が残されている可能性が高い遺跡です。伊北の地を治めていた山内氏の重要な拠点であった可能性が高いことが想像されます。また、当初は中世遺跡と考え調査に臨みましたが、縄文時代、弥生時代のものも出土することがわかりました。

最後になりますが、黒谷舘跡の調査にご協力頂きました町民の方々および町内各業者の方々に御礼申し上げ、調査結果報告といたします。

黒谷舘跡の全景写真（平成２４年度調査地）

黒谷舘跡の発掘調査歴

平成２０年度　7月３０日～１０月　３日（試掘調査）

平成２４年度　5月　１日～１０月３１日（本発掘調査）

平成20年度の試掘調査では、朝日地区センターの西側に２９本のトレンチ（試掘坑）、朝日地区センターのグラウンドに２本のトレンチを設定し、合計３１本の試掘調査を実施しました。試掘調査は、遺跡が本当にあるのかどうか、保存するための遺跡範囲決定のため実施します。

試掘調査で、館の堀跡が確認され、朝日地区センターのグラウンドからは、多数の柱跡を確認しました。